【研究ノート】

鯨に魅せられた男たち

――エイハブ船長とロイズ船長の物語――

浜　口　　尚

は　じ　め　に

アメリカ帆船式捕鯨黄金時代の 1844 年、アメリカ合衆国は 644 隻の捕鯨船と 1 万 7594 人の鯨捕りたちを世界の津々浦々に送り出し、栄華を誇っていた（Hohman 1928: 41）。本稿においては、その黄金時代に捕鯨船に乗り組んだのちの小説家ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）、メルヴィルが生み出した小説『白鯨』（*Moby-Dick or The Whale*）の主人公、エイハブ（Ahab）船長、およびメルヴィルと同時代に活躍した実在の捕鯨船長トーマス・ウエルカム・ロイズ（Thomas Welcome Roys）を取り上げ、鯨および捕鯨のもつ魅力を以下の手順で考察する。

第 1 節においては、本論の前段として、アメリカ帆船式捕鯨時代の捕鯨、特に鯨と直接対峙する銛手の危険性を概説する。

第 2 節では、ハーマン・メルヴィルの小説『白鯨』の主人公、エイハブ船長を取り上げ、白鯨―モーヴィ・ディック―に魅入られて命を落とすことになる彼とその妻との関係を追究する。

第 3 節においては、『白鯨』の著者メルヴィル自身による捕鯨航海の軌跡を綿密に振り返り、鯨捕りメルヴィルおよび小説家メルヴィルの実像を模索する。

第 4 節では、メルヴィルと同時代の捕鯨船長トーマス・ウエルカム・ロイズによる北極海捕鯨における大成功までの道のりとその後の人生の暗転を精察し、あわせてメルヴィルとの接点を探査する。

第 5 節においては、第 1 節から第 4 節までの検討を踏まえたうえで、エイハブ船長、メルヴィル、ロイズ船長の人生を変えた鯨および捕鯨のもつ魅力を筆者なりに解明し、本稿のまとめとする。

本稿により、鯨および捕鯨のもつ魅力を幾ばくなりともご理解いただければ、捕鯨文化の比較研究に 30 年以上かかわってきた筆者としては幸甚である。

1. 鯨あるいは死

本節の冒頭に 1 枚の写真を掲げておく。筆者が 2019 年 10 月 26 日にアメリカ合衆国マサチ

ューセッツ州ニューベッドフォード（New Bedford）市、ニューベッドフォード公共図書館（New Bedford Free Public Library）前に屋外展示されてある銛手像を撮影したものである（図1）。その背後には“A DEAD WHALE OR A STOVE BOAT”なる短句が刻印されている。ここでは「死んだ鯨か、壊されたボートか」と訳しておく。アメリカ帆船式捕鯨時代における鯨捕りたちの仕事の厳しさを端的に物語っている警句である。

図 1　ニューベッドフォード公共図書館前銛手像
（2019 年 10 月 26 日、筆者撮影）

この警句は次節で取り上げるハーマン・メルヴィルの小説『白鯨』「第 36 章　後甲板」においても用いられている（Melville 1851: 161）。英語それ自体は難しくはなく、大意は掴めるが、それでも日本語に訳そうとするとなかなかよい表現がでてこない。歴代の翻訳者たちも苦労しているようである。

「鯨を殺（ば）らすか短艇に穴があくかだ」（阿部知二訳）（メルヴィル　1972: 103）
「殺（や）るか殺（や）られるか」（千石英世訳）（メルヴィル　2000a: 390）
「鯨が死ぬか、ボートが沈むか」（八木敏雄訳）（メルヴィル　2004a: 395）

銛打ちに成功し、うまくいけば鯨を仕留めることができるが、へたをすれば、返り討ちに遭い、捕鯨ボートが破壊され、命を落とす危険性もある。このような鯨捕りたちの生と死のせめぎあいを訳文の中に読み取っていただければ、鯨（あるいは捕鯨）をめぐる物語の真髄に近づくことができるはずである。具体例を一つ取り上げておく。

アメリカ合衆国東海岸コネティカット州ノーウィッチ（Norwich）出身、20 歳の若きイェール

大学生ジョン・パーキンス（John Perkins）は、視力回復のため学業を中断し、捕鯨船タイガー（*Tiger*）号に乗り組み、1845 年 11 月 4 日、北アメリカ大陸西岸沖の捕鯨海域をめざして、コネティカット州ストニントン（Stonington）を出港する（Druett 1992: 1, 9）。南アメリカ大陸南端のホーン岬（Cape Horn）沖を回り、物資補給地のハワイ（Hawaii）諸島を経て、捕鯨海域に到達するも、鯨の捕殺にはなかなか成功しない。1846 年 6 月 5 日付けの彼の日記には、「航海 7 か月、鯨 1 頭も獲れず、全員失望」と記されている（Druett 1992: 89）。それから 10 日後の 6 月 15 日、パーキンスが乗り組んだ捕鯨ボートは鯨への銛打ちに成功するも、苦しまぎれの尾ビレの一撃を頭部にくらったパーキンスは即死、捕鯨ボートも破損し、転覆する。彼の遺体は海中に没し、回収することも叶わなかった（Druett 1992: 90–91）。その 2 日後、タイガー号はようやく 1 頭目の捕殺に成功する（Druett 1992: 93）。「殺すか、殺されるか」を如実に示した捕鯨の一コマであった。

この時代の捕鯨船には全長 28 フィート（8.5 メートル）から 30 フィート（9.1 メートル）の捕鯨ボートが 4、5 隻積載され（Ashley 1938: 60; Leavitt 2013: 17, 19）、航海中に鯨を発見すれば、捕鯨ボートを降ろし、鯨を追跡、捕殺を試みたのであった。タイガー号の船長夫人が記した日記によれば、1846 年 12 月 31 日、メキシコ、バハカリフォルニア（Baja California）半島マグダレーナ（Magdalena）湾内でのコククジラ捕鯨に際しては、同船から 4 隻の捕鯨ボートが出漁している（Druett 1992: 176）。これらの捕鯨ボートは、海上で素早く動き回れるように、シーザー材を用いて軽量に作られていたが、それゆえに衝撃には脆かった（キング　2022: 182）。マッコウクジラやコククジラの頭突きによりたやすく船底に穴をあけられたり、尾ビレの一撃で船縁が粉砕されたのである。

筆者の調査地、カリブ海、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ（Bequia）島では、アメリカ帆船式捕鯨から捕鯨技術を習得し、1875 年頃に同島において捕鯨を創始した人物の末裔たちが 2023 年現在も捕鯨を実施している。2005 年 3 月 8 日、現地調査中であった筆者はアメリカ式捕鯨ボートを模して現地で建造された全長 8.25 メートル、幅 2.17 メートルの捕鯨ボートに同乗し、ザトウクジラの探鯨航海に出かけた。午前 5 時 55 分にベクウェイ島を出帆し、午後 1 時 35 分に帰還、同日の鯨の発見、追跡はなかった（浜口　2016: 98–99）。

カリブ海を帆走中、強い貿易風で海は波立っており、転覆すれば、「泳ぐのは無理だなぁ…」と恐怖を感じたことがあった。鯨の追跡中でなくとも生命の危機を覚えたぐらいであるから、鯨と対峙した時の恐怖はおそらく、想像を絶するであろう。経験していれば、この場でもっと臨場感のある話を記すことができたかもしれないが、海の藻屑と消えた可能性もある。まずは平凡な話しか書けないことに感謝しておきたい。

冒頭の写真に戻る。本ブロンズ像のモデルは実在のニュージーランド人銛手リチャード・マクラクラン（Richard McLachlan）で、銛手から捕鯨船の四等航海士まで昇格するも、若くして命

を落としている（Leavitt 2013: 63）。多くの男たちは、命を落とす危険性があっても、なぜ捕鯨航海に出かけたのであろうか。次節以下においてその辺りを探っていきたい。

2. エイハブ船長と妻ウナ・スペンサー

エイハブ船長とはメルヴィルの小説『白鯨』の主人公である（図 2）。同書の要点を簡略化してまとめれば、以下のとおりである。前航海において、「モービィ・ディック」と呼ばれる白い鯨の捕殺を試みるも反撃を受け、片脚[1]を食いちぎられたエイハブ船長が、新たなる捕鯨船ピークォッド号に乗り組み、宿敵白鯨を探し求めて復讐の航海に旅立ち、結局は返り討ちに遭い、海底に没していく、という話である。

片脚を喪失したエイハブ船長のモーヴィ・ディックに対する怨念は壮絶である。そのことは次の文章を読めばわかるのである。

> モーヴィ・ディックが、おれを、こんな死んだ切り株みたいな義足に押しつけたのだ。〔…〕おれの脚をかっさらって行ったのは、そう、おれを永久に役立たずにしてしまいおったのは、あの呪わしい白鯨だったのだ！（メルヴィル　2000a: 394）

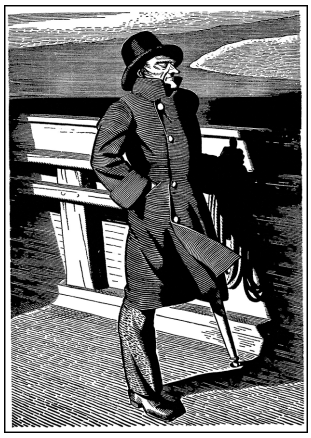

図 2　エイハブ船長（© Rockwell Kent）
（出典：メルヴィル　2000a: 505; 2004b: 71）

次節で詳しく取り上げるように、作者のメルヴィル自身が捕鯨船に乗り組み、捕鯨活動に従事した経験を有している。その個人的見聞を基礎に当時の鯨や捕鯨をめぐる文献を渉猟し、事実や史実に想像を織り込みながら、メルヴィルはエイハブ船長とモービィ・ディックとの闘いの背後で、アメリカ帆船式捕鯨時代の鯨捕りたちの生きざまや当時の社会状況を現代に語り伝えてくれている。長年、捕鯨文化の比較研究に従事してきた筆者にとって、『白鯨』は読むたびに新しい事実を気づかせてくれる書となっている。

今回の再読において注目したのが、女性と捕鯨とのかかわりである。

「『白鯨』には目立った女性の登場人物が出てこない」（キング　2022: 153）

「メルヴィルの小説『白鯨』では、女性がほとんど描かれていない。実際、エイハブ船長には妻がいたが、その妻は個人としては現れず、二度言及されているのみである」（Norling 2000: 1）

「『白鯨』には、全編を通じて、女性が登場することはおろか、作品中で言及されることはほとんどないといっていよい」（大串　2002: 211）

上記のようにメルヴィル研究者も指摘していることであるが、『白鯨』には物語の展開に影響を与える女性は登場してこない。船長夫人など、ごく一部の例外を除いて、捕鯨船には女性は乗り組まない（乗り組めない）ので[2]、捕鯨船を舞台にした物語に想像力を働かせたとしても、女性を登場させることは難しかったのかもしれない。

ピークォッド号乗組員のうち、妻の存在に言及されているのは、船長エイハブ、一等航海士スターバック、三等航海士フラスクの三人のみであり、そのうち妻の名前も記されているのはスターバックの妻「メアリー」（メルヴィル　2000b: 517, 580, 632）だけである。以下の文章から、スターバックとその家族との親密な関係を読み取ることができる。

「スターバックにも妻子があります。幼なじみで、兄と妹のような年齢で、青春の日に得た妻であり、そうして、さずかった子です」（メルヴィル　2000b: 579）、「コッド岬出身の妻とその妻によって授かった子供の待つあたたかな家庭へ、遠い辺境の海からはるかに思いをはせるとき、〔…〕かれ本来の性格にそなわる大胆さからかれ自身を遠ざけてしまうという傾向が生じがちであった」（メルヴィル　2000a: 290）。捕鯨航海中、自らの命を守ってこそ、家族との絆を保つことができる。その家族への思いがスターバックの無謀な行動への抑止力となっていたのである。鯨を捕殺するためには、時には命を懸けて鯨と対峙する必要がある。しかし、それでも守るべき家族のために自らの命は失ってはならないのである。

一方、エイハブ船長にも妻子はいたが、その関係はスターバックとは大きく異なっていた。「あの幼な妻とはな、五十歳をこえてから結婚したのだ。しかも結婚した翌日には、もうわたしはホーン岬めざして出港していた。〔…〕妻？　ちがう。寡婦だ。夫が生きているのに寡婦なのだ！」（メルヴィル　2000b: 577）。「よいか、エイハブは永遠にエイハブなのだ。この劇のすべては、変更を許さぬ命（めい）によって、はや定められておるのだ。〔…〕道化も同然、おれは運命の配下、命（めい）のまま動く！」（メルヴィル　2000b: 619）。鯨に、白鯨に憑りつかれたエイハブにとって妻子は顧みるべき存在ではなかったのである。

長年、命（いのち）を懸けて鯨と闘ってきたエイハブは、鯨を捕殺することが人生そのものであった。後半生の一コマとして妻子を得たが、人生の歯車を変えるには遅すぎた妻子であった。エイハブは定められた運命に従って、妻子を振り返ることなく白鯨に闘いを挑み、自滅する。そもそも彼にとって、妻は結婚した当初から寡婦であった。もちろん、片脚を奪った白鯨への復讐心はあったが、それ以上に鯨（あるいは捕鯨）のもつ何かにエイハブは引き寄せられていたのである。エ

イハブ自身の言葉を借りれば、「白鯨は、すべてを引き付ける磁石」（メルヴィル　2000b: 368）であった。

では、『白鯨』では名前もなく、結婚と同時に寡婦扱いされていた妻とはどのような人物であったのだろうか。メルヴィルが原著を出版した当時（原著出版 1851 年）にはフェミニズムもなく、名無しの寡婦でも問題はなかったかもしれないが、今は違う。エイハブの妻にはウナ・スペンサー（Una Spencer）という名前が与えられ、エイハブ亡き後に再婚（再々婚）もしている。

エイハブ船長の妻を主人公にし、彼女の波乱万丈の人生を綴った小説がセナ・ジーター・ナスランド（Sena Jeter Naslund）の『エイハブの妻、あるいは星を見つめる人』（*Ahab's Wife or, The Star-Gazer*, 1999）である[3)]。同書は、「エイハブ船長は私の最初の夫でも、最後の夫でもなかった」（Captain Ahab was neither my first husband nor last.）（Naslund 1999: 1）といういかにも現代的な書き出しで始まる。エイハブ船長とかかわる本なので、少々長くなるが、筆者なりの要約を掲げておく。

> キリスト教の教義にとらわれない自由な考え方をもつ女性ウナ・スペンサーは、恋心を抱く二人の男性を追い、16 歳で男装して捕鯨船に乗り組むも、マッコウクジラに体当たりされ、捕鯨船は沈没する。捕鯨ボートで漂流中、自死した人物の流した血をすすり、人肉を食し、ウナたちはなんとか生き延び、救出される。ともに救出された二人の男性のうち、一人は帆柱上から転落死。ウナはもう一人と結婚するも、その夫はやがて精神が蝕まれ、二人は離別する。のちにウナたちの救出にかかわったエイハブ船長とウナは二度目の結婚をし、一人息子に恵まれる。白鯨に片脚を奪われたエイハブ船長は復讐を試みるも返り討ちに遭い、捕鯨船もろとも海の藻屑と消え去る。その沈没した捕鯨船の唯一の生き残りであるイシュメール（『白鯨』の語り手）と、あるパーティーで出会ったウナは彼と交際を始めるようになり、のちに結ばれる。（Naslund 1999）

白鯨に憑りつかれて命を落としたエイハブ船長とは異なり、与えられた現実を主体的に生きようとする一女性の姿をウナ・スペンサーの中に読みとることができる。エイハブには鯨あるいは死しかなかったが、ウナには生きる力と次の夫が存在していたのである。

3. 鯨捕りメルヴィル

1819 年 8 月 1 日、ニューヨーク（New York）市で生まれたメルヴィルは、1840 年 12 月末にニューベッドフォードにおいて全長 104 フィート 8.25 インチ（31.91 メートル）、幅 27 フィート 10 インチ（8.48 メートル）、総重量 358.75 トンの捕鯨船アクーシュネット（*Acushnet*）号と乗船契約を結び、翌 1841 年 1 月 3 日、ニューベッドフォードの対岸に位置するフェアヘイヴン（Fairhaven）から捕鯨航海に旅立っている（Heflin 2004: 15, 42; 杉浦　1983: 457）。

アクーシュネット号は途中で鯨を捕殺しながら、3 月 13 日にブラジル、リオデジャネイロ（Rio de Janeiro）港に到着、2 日間の滞在後、南アメリカ大陸南端のホーン岬に向け出港。4 月 16 日、ホーン岬沖を回り、太平洋に進入、5 月 7 日にチリ沖マスアフエラ（Mas Afuera）島の東北東、5 月 17 日にサンアンブローズ（Saint Ambrose）島の東を通過し、6 月 23 日、水・食料ほかの補給のためペルー、サンタ（Santa）湾に停泊する（Heflin 2004: 48, 61, 62, 65, 66, 69）。

7 月 2 日、捕鯨漁場の「オフショア・グラウンド」（Off-Shore Ground）[4]に向けサンタ湾を出港、12 日間の航海でオフショア・グランウンドに到着。10 月末、オフショア・グラウンドでの操業を終え、食料としてのリクガメ捕獲のためガラパゴス（Galápagos）諸島に向かい、11 月 19 日、ガラパゴス諸島チャタム（Chatham）島のステファンス（Stephens）湾に停泊、上陸しリクガメを捕獲する（Heflin 2004: 72, 76, 90, 99, 100）。

11 月 25 日、チャタム島でのリクガメ猟を終え、次の補給地であるペルー、トゥンベス（Tumbes）に向け出発、12 月 2 日にトゥンベス到着。12 月 15 日、トゥンベスを出港し、ガラパゴス諸島、オフショア・グランウンド経由でマルケサス（Marquesas）諸島ヌクヒヴァ（Nukuhiva）島に向かう。192 日間の航海を経て、1842 年 6 月 23 日にヌクヒヴァ島タイオハエ（Taiohae）湾に到着する（Heflin 2004: 102, 106, 110, 113, 125）。

ヌクヒヴァ島滞在中の 7 月 9 日にメルヴィルはアクーシュネット号から脱走し、1 か月間同島内で逃亡生活を送る。8 月 9 日、オーストラリアの捕鯨船ルーシー・アン（*Lucy Ann*）号の乗組員となり、9 月 1 日にマルケサス諸島ラドミニカ（La Dominica）島からマッコウクジラ捕鯨に出漁する（Heflin 2004: 143, 161–163）。

9 月 19 日、タヒチ（Tahiti）島パペーテ（Papeete）到着。メルヴィルは同地で乗組員の反乱に参加し、おおよそ 3 週間留置場で拘束される。10 月 19 日以降にメルヴィルはタヒチ島の対岸に位置するエイメオ（Eimeo）島に逃亡、11 月初旬、同島に停泊していたアメリカ、ナンタケット（Nantucket）の捕鯨船チャールズ・アンド・ヘンリー（*Charles and Henry*）号と銛手候補者として契約、乗船する（Heflin 2004: 163, 169, 170, 175, 178）。

11 月 7 日、オフショア・グラウンドに向けパペーテを出港し、1843 年 1 月 27 日にチリ沖マスアフエラ島を通過、4 月 27 日、ハワイ諸島マウイ（Maui）島ラハイナ（Lahaina）に入港。同地でメルヴィルは捕鯨船チャールズ・アンド・ヘンリー号との契約を終え、5 月 18 日にラハイナからオアフ（Oahu）島ホノルル（Honolulu）に渡る。8 月 3 日、アメリカ合衆国太平洋艦隊の旗艦ユナイテッド・ステイツ（*United States*）号がホノルルに入港し、メルヴィルは同船と 3 年間もしくは 1 航海の乗船契約を結ぶ（Heflin 2004: 178, 183, 184, 193）。

8 月中旬、メルヴィルはユナイテッド・ステイツ号に二等水兵として乗り組み、ホノルルを出港、10 月初旬にマルケサス諸島ヌクヒヴァ島、同月中旬にタヒチ島、下旬にチリ、ファンフェルナンデス（Juan Fernandes）島に立ち寄り、11 月下旬にチリ、ヴァルパライソ（Valparaiso）に入港する。ヴァルパライソ出港後、1844 年 1 月から 2 月にかけてペルー、カヤオ（Callao）に停泊、3 月 28 日から 4 月 16 日まではメキシコ、マサトラン（Mazatlán）に滞在している[5]。マサ

トラン出港後、8月中旬にブラジル、リオデジャネイロに寄港し、10月初旬にボストン（Boston）に帰還している（Madison 2016: 265; 杉浦　1983: 458）。

上記3年10か月間の海外生活中、メルヴィルは2年1か月余りの間、3隻の捕鯨船に乗り、また2か月間弱、捕鯨船員として逃亡生活や留置生活を送っている。『白鯨』の執筆構想として、出版人あてに送付した1850年6月27日付けの手紙には「著者自身による2年以上の銛手経験によって描かれている〔…〕」（Madison 2016: xxiv–xxv）とあるが、出港当初から銛手を担当していたわけではない。銛手候補者として乗り組んだ3隻目のチャールズ・アンド・ヘンリー号において、実際に銛手を担った可能性はあると思われるが、確認する手立てはない。しかしながら、少なくとも銛手候補者としての力量を示すために試し打ちぐらいはしたはずである。銛手として活躍できたか否かは別として、メルヴィル自身が鯨とかなり近しい位置にいたことは事実である。それは、『白鯨』中の次の文章からもわかるのである。

> 捕鯨航海の成否を握っているのは銛打ちその人にほかならぬということなのだ。〔…〕複数の国の捕鯨船にあれこれ乗り組んだ経験からいわせてもらえば、捕鯨の失敗の原因は、鯨とボートの速度の落差にあるのではなく、いま述べたように銛打ちが余りにも疲労困憊しているということ、これに尽きるのである。（メルヴィル　2000b: 52–53）

メルヴィルは、マルケサス諸島ヌクヒヴァ島において捕鯨船アクーシュネット号から脱走し、1か月間同島内を逃亡、その間の先住民集落での暮らしなどを題材にして第一作『タイピー』（*Typee*）（1846年）を、2隻目に乗り組んだ捕鯨船ルーシー・アン号での活動やタヒチ島における捕鯨船員の反乱、自らの逃亡などを題材にして第二作『オムー』（*Omoo*）（1847年）を執筆、両著とも南太平洋を舞台とした海洋冒険小説として好評で、売れ行きもよかった（大和田 2003: 143–144; 杉浦　1983: 457–459）。これら二作の成功によりメルヴィルの作家としての前途は洋々たるものに思えた（図3）。

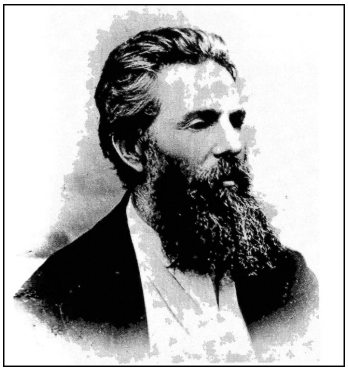

図3　ハーマン・メルヴィル
（出典：Rollyson et al. 2007: 9）

ところがである。鯨に、捕鯨に魅せられて執筆した第六作『白鯨』（1851 年）は、本人の思惑に反して不評に終わった（杉浦　1983: 460）。ここから、メルヴィルの人生の歯車は狂い始める。「一八五一年から五六年にかけての彼の行状は、よろしくないものであった。間歇的に妻に暴力を振い、母にも気まぐれな態度を示した」（オールソン　1983: 194）。『白鯨』出版後、家庭内暴力が始まるのである。

メルヴィルは 1846 年から 1857 年にかけて小説 8 作品を発表しているが、計 3 万 5000 部を売り上げただけで、家族を養っていくのに十分ではなかった（Rollyson et al. 2007: 8）。ある晩などは酒を飲んで泥酔して帰宅、妻を殴りつけるばかりか階段から突き落したという話もある（巽 1995: 30）。作家として生計を立てていくことができず、酒を飲んで憂さ晴らし。あげくの果てに妻への暴力。まさに貧すれば鈍するの状態であった。

1860 年代半ば以降、作家メルヴィルは世間から完全に忘れ去られ、1866 年末から 19 年間、ニューヨーク税関検査官として一日 4 ドルの日当で働き、1891 年 9 月 28 日、ニューヨークにおいて 72 年の生涯を終えたのであった（杉浦　1983: 464, 465）。鯨に魅入られたメルヴィルは、エイハブ船長と同様、命（めい）のままに定められた人生を歩んだのかもしれない。

4. ロイズ船長の栄光と挫折

前節で取り上げたメルヴィルが捕鯨船 3 隻とアメリカ軍艦艇 1 隻を乗り継ぎ、大西洋、太平洋を航海していた時期（1841 年～1844 年）に、捕鯨船 2 隻の船長として大西洋、インド洋、太平洋において多くの鯨を捕殺し、捕鯨船長として名声を高めつつあったのが、本節で取り上げるトーマス・ウエルカム・ロイズである。

1816 年、ニューヨーク州の小村プルトニーヴィル（Pultneyville）の農家に生まれたロイズは、1833 年 17 歳の時に、ヘンリー・グリーン（Henry Green）船長が指揮するサグハーバー（Sag Harbor）の捕鯨船ハドソン（*Hudson*）号に新米鯨捕りとして乗り組む（Marquardt 2019: 18; Schmitt et al. 1980: 2）。1835 年にハドソン号の銛手に昇格、1839 年には捕鯨船ジェム（*Gem*）号の一等航海士として雇用され、その 2 年後の 1841 年に捕鯨船クレセント（*Crescent*）号の船長を任されるまでになっている（Schmitt et at. 1980: 197）。これらの経歴はロイズが鯨捕りとして能力が高かったことを物語るものである。以下、ロイズの捕鯨船長としての 2 航海を振り返る。

1841 年 9 月 27 日、ロイズは捕鯨船クレセント号（340 トン）の船長としてサグハーバーを出港、アフリカ大陸南端喜望峰（Cape of Good Hope）の南側海域において鯨油 400 バレルを獲得し、次にクロゼ（Crozet）諸島海域で鯨油 600 バレルを獲得する。その後北上し、インドネシア、ジャイロロ（Djailolo）海峡で座礁するも、苦心の末に離礁して、近隣のゲベ（Gebe）島に上陸する。ゲベ島からさらに北上し、小笠原諸島沖、日本沿岸を通過してカムチャッカ（Kamchatka）半島へ。同半島東側でセミクジラを捕殺し、鯨油で船倉を満たしている（Schmitt et al. 1980: 5–6, 8; Starbuck 1878: 382–383）。

北方海域での捕鯨シーズン終了後、カムチャッカ半島から船の修理と休養のためにハワイ諸島をめざすが、経線儀故障のため、同諸島を通過する。多数の船員が壊血病を発症したため、上陸地を探索し、キリバス、ライン（Line）諸島のパルマイラ（Palmyra）島に上陸するも成果なし。次にトンガ、ヴァヴァウ（Vava'u）諸島のアマルグラ（Amargura）島に上陸するも成果なし。この後、ニュージーランドをめざす。ニュージーランド到着直前、二十数名の壊血病が悪化するも、到着後の 1 か月間の養生で全員が回復している（Schmitt et al. 1980: 6, 9）。

この捕鯨の旅はつらくて悲惨であったが、捕鯨船自体は鯨油と鯨髭で満杯となり、帰路の途につく。ニュージーランド出港後、チャタム（Chatham）諸島を経てホーン岬沖を回り、リオデジャネイロに立ち寄り、リオデジャネイロで鯨油 1500 バレルをよい価格で売却したのち、1843 年 8 月、おおよそ 1 年 11 か月の航海を終え、サグハーバーに帰還している（Schmitt et al. 1980: 9–10）。

この航海で、ロイズはマッコウ油 300 バレル、鯨油 1200 バレル、鯨髭 1 万 8000 ポンドという驚異的な 4 万ドルの価値を持ち帰り、同時代人から尊敬と称賛を集めている。また同時にかつて仕えたヘンリー・グリーン船長の娘、アン・エリザ・グリーン（Ann Eliza Green）の心も掴み、帰国直後の 8 月 24 日に彼女と結婚している（Schmitt et al. 1980: 10）。鯨捕りロイズの成功の第一幕である。

結婚わずか 2 か月余後の 1843 年 10 月 29 日、ロイズは再び捕鯨船ジョゼフィン（*Josephine*）号（397 トン）の船長としてサグハーバーを出港、ホーン岬沖を経て、ハワイ諸島に短期間立ち寄ったのち、カムチャッカ半島沖の漁場で一漁期捕鯨に従事し、鯨油 2400 バレルを獲得、漁期の終わりに捕鯨船の修理および補給のために再度ハワイ諸島に入港している（Schmitt et al. 1980: 11–12; Starbuck 1878: 406–407）。

その後、ロイズはハワイ諸島から小笠原諸島沖を経て、カムチャッカ半島近辺の夏の漁場に向かうも、カムチャッカ半島沖の漁場とアラスカ北西岸沖の漁場の間で操業中に負傷し、カムチャッカ半島ペトロパブロフスク・カムチャツキー（Petropavlovsk-Kamchatsky）に入港、船を一等航海士に任せ、ロイズは同地で静養している（Schmitt et al. 1980: 13）。

静養後、キリバス、ギルバート（Gilbert）諸島オーシャン（Ocean）島を経て、1845 年 12 月 20 日、オーストラリア、シドニー（Sydney）に入港、シドニー出港後は探検家や捕鯨者がほとんど航海したことのない南極大陸岸の叢氷帯まで南下し東転、ホーン岬と同じ経度あたりまで進み、そこから北上、帰路についている（Schmitt et al. 1980: 15, 18–19）。

1846 年 9 月 14 日、ロイズと捕鯨船ジョゼフィーン号は 2 年 10 か月 15 日間の劇的で危険な航海ののち、マッコウ油 60 バレル、鯨油 3000 バレル、鯨髭 6000 ポンドとともにサグハーバーに帰還している（Schmitt et al. 1980: 19; Starbuck 1878: 406–407）。ロイズの捕鯨船長としての第二幕も成功裏に終わったのである。

同時代人として、メルヴィルとロイズは捕鯨を通して、どの程度近しい関係にあったのだろう

か。現在までのところ、両者の個人的な接触は報告されていない。あるいは、どこかで（たとえば、ニューヨーク市の街角など）ですれ違っていたかもしれないが、それは想像にまかせるしかない。

航海歴からわかる両者の最初の繋がりは以下のとおりである。メルヴィルは1842年11月初旬、タヒチ島の対岸に位置するエイメオ島で捕鯨船チャールズ・アンド・ヘンリー号に銛手候補者として乗り組み、南太平洋のオフショア・グラウンドで捕鯨に従事、チリ沖マスアフエラ島近海を経て、1843年4月27日にハワイ諸島マウイ島ラハイナに入港している。同時期、ロイズは捕鯨船クレセント号の船長として1842年の夏の終わりにカムチャッカ半島東側での捕鯨を終え、ハワイ諸島を通過したのち、キリバスのパルマイラ島、トンガのアマルグラ島への短期上陸を経て、ニュージーランドで1か月間程度滞在し、1843年8月、サグハーバーに帰還している。この間（1842年11月～1843年4月）、両者は太平洋上において、捕鯨船に乗り組んでいたか、あるいは島に上陸していたと考えられるのである。

次に二度目の両者の縁である。メルヴィルはアメリカ軍艦艇ユナイテッド・ステイツ号の二等水兵として、1844年1月から2月にかけてペルーのカヤオに、次いで3月28日から4月16日までメキシコのマサトランに滞在している。同時期、ロイズは、サグハーバーの出港日（1843年10月29日）から推定すれば、捕鯨船ジョゼフィーン号の船長として、南アメリカ大陸南端のホーン岬沖からハワイ諸島の間にいたはずである（メルヴィルが最初に乗船した捕鯨船アクーシュネット号はフェアヘイヴン出港後おおよそ3か月半でホーン岬沖を通過している。同様に考えれば、遅くとも1844年2月中旬までにジョゼフィーン号はホーン岬沖を通過していることになる）。ロイズが南太平洋、あるいは北太平洋を航海中、メルヴィルは南太平洋に面した都市（カヤオ）、あるいは北太平洋に面した都市（マサトラン）に滞在、もしくは両都市間を航海していたと考えられる。ここにも少しの結びつきはあったのである。

ロイズが捕鯨船長として後世まで名を残したのは、捕鯨船長として初めてベーリング海峡を通過し、北極海においてホッキョククジラ捕鯨に従事、大成功を収めたからである。ロイズ以前の鯨捕りたちは、遭難を恐れて未知の北極海へはあえて進出しなかったのである。

1847年7月14日、ロイズは捕鯨船スーペリア（*Superior*）号（275トン）の船長としてサグハーバーを出港、翌1848年7月23日、ベーリング海峡を越えて北極海に進出、最終的にベーリング海峡の北側でホッキョククジラ11頭を捕殺し、鯨油1600バレルを生産、10月3日にハワイ諸島ホノルルに寄港したのち、1849年5月5日、1年9か月21日間の航海を経てサグハーバーに帰還している（Bockstoce 1986: 23–24; Schmitt et al. 1980: 28; Starbuck 1878: 450–451）。この操業でロイズは途中送付分を含めて、鯨油1700バレル、鯨髭2万2936ポンドを生産している（Starbuck 1878: 450–451）。

ロイズによる北極海漁場の発見の成果は絶大であった。1849年と1850年の2年間だけで、北極海漁場において、計298隻の捕鯨船が鯨油45万530バレル、鯨髭613万5600ポンドを生産

し、800 万ドル以上の価値を持ち帰っている（Schmitt et al. 1980: 29, 32）。

このロイズの栄光の陰に、のちの彼の人生に影響を与えたであろう個人的に大きな出来事があった。ロイズがスーペリア号でサグハーバーを出港した直後の 1847 年 8 月 3 日、彼の妻は長男出産直後に死亡している（Schmitt et al. 1980: 23, 32）。この情報をロイズは遅れて出港した他の捕鯨船から入手した可能性が高く、またそのことが彼のベーリング海峡通過の決断に大きな影響を与えたであろうとされている（Druett 2001: 155; Schmitt et al. 1980: 23）。捕鯨船長の娘であったロイズの妻は、捕鯨船長の家族の暮らし方を十分理解していた。数年間の捕鯨航海中、安心して家庭を任せられる妻を失ったことは、のちのち響いてくるのである。

スーペリア号での帰還から 3 か月余後の 1849 年 8 月 17 日、ロイズはアメリカで 3 番目に大きい 579 トンの捕鯨船シェフィールド（*Sheffield*）号の船長としてニューヨークから北極海に向けて旅立ち、4 年 6 か月 17 日間の航海ののち、1854 年 1 月 24 日、ニューヨークに帰還、この航海でロイズは鯨油 8000 バレル、鯨髭 10 万ポンド超、10 万ドル以上の価値を獲得している（Schmitt et al. 1980: 33, 50）。今回も捕鯨船長としての彼の名声をさらに高めた航海であった。

妻の死までの 3 航海は、1 年 11 か月、2 年 11 か月、1 年 10 か月とおおよそ 2〜3 年の操業であったが、妻の死後の航海は 4 年半となった。もちろん捕鯨船が大きくなったため、船倉が鯨油を入れた樽で満杯になるまで時間がかかるという要因もあったと考えられるが、留守を預かる妻がいなくなったことも帰還を急がなかった理由の一つであろう。このシェフィールド号での大成功を最後にロイズの人生は暗転する。

1855 年、ロイズはニューロンドン（New London）の捕鯨船ハンニバル（*Hannibal*）号の船長として、カナダのハドソン（Hadson）湾においてシロナガスクジラ 1 頭の捕殺に成功、この頃から彼はナガスクジラ類用捕鯨道具の開発に着手している（Schmitt et al. 1980: 197–198）。本航海はわずかに鯨油 28 バレルを生産しただけで大失敗に終わっている（Starbuck 1878: 532–533）。

1856 年夏、ロイズは捕鯨船ウィリアム・E・サフォード（*William E. Safford*）号の船長としてポルトガル沖を航海、同船には彼が開発した新型の強力な銛撃銃（harpoon gun）が装備されており、当該銛撃銃の暴発事故により、ロイズは左手を喪失している（Winter and Sharpe 1971: 349）（図 4）。その後もロイズはナガスクジラ類用捕鯨道具の開発に努めるが、結果的に 2 万 5000 ドル以上を費やすも成功しなかったのである（Schmitt et al. 1980: 77）。

図 4　トーマス・ウエルカム・ロイズ
（出典：Schmitt et al. 1980: 115）

1860 年、ロイズは捕鯨航海中にフランスで知り合った 20 歳代の女性と再婚、ロングアイランド（Long Island）に新居を構えたが、のちにこの妻は 3 人の子供を連れて、ロイズの捕鯨船の一等航海士であった人物と駆け落ちしている（Schmitt et al. 1980: 80, 151, 181）。捕鯨船長の娘であった最初の妻とは異なり、フランスからやってきた若き二番目の妻は、ロイズの鯨への執着を理解できなかったのかもしれない。

しばらく音信不通であったロイズは 1876 年冬にサンディエゴ（San Diego）に現れ、南下する船に乗り、メキシコのマサトランで下船、1877 年 1 月 29 日、無一文の果てに同地において脳卒中により亡くなっている（Schmitt et al. 1980: 181）。鯨の虜になり、捕鯨に情熱を燃やした男の最期であった。前節でみたように、メルヴィルは 1844 年 3 月 28 日から 4 月 16 日までアメリカ軍艦艇ユナイテッド・ステイツ号の二等水兵としてマサトランに滞在している。最後にマサトランの地でメルヴィルとロイズは再び繋がったのである。

5. 鯨に魅せられて（まとめ）

本節では、第 1 節から第 4 節において考察したアメリカ帆船式捕鯨時代の鯨捕り 3 人―エイハブ船長、メルヴィル、ロイズ船長―について総括したうえで、鯨および捕鯨のもつ魅力について筆者なりの考えを提示し、全体のまとめとする。

エイハブ船長は人生半ば過ぎの捕鯨航海中に白鯨と出会い、最初の対決で片脚を喪失、失意の帰郷となる。白鯨に憑りつかれた同船長は次の航海で復讐を試みるも結局は返り討ちにあい、命

を落とし、若妻と一人息子をあとに残す。

メルヴィルは鯨捕りとしての自らの経験に基づき小説『白鯨』を執筆するも、あまりにも鯨と捕鯨に固執したため、本は売れず、小説家としての名声を失い、生活苦から酒に溺れ、家庭内暴力に陥る。後半生は世間から忘れ去られ、税関検査員として糊口を凌ぎ、ひっそりと人生の幕を下ろす。

ロイズ船長は誰もあえて実行しなかった北極海捕鯨の大成功により名声と金銭を獲得、もっと大きなナガスクジラ類の捕殺をめざして、新型捕鯨道具の開発に取り組むも実験に失敗し、左手を喪失する。その後も開発を継続するも結局は全財産を亡失、二番目の妻には駆け落ちされ、無一文の果てに見知らぬ土地で客死する。

鯨と捕鯨に魅せられた男たちは、妻を、家庭を顧みず、やがては破滅する。鯨とはそれほどまでの魅力をもつ生き物なのである。では、その魅力とは何なのであろうか。もちろん、鯨に金銭的価値があったのは事実である。

ロイズ船長と同時代のトーマス・A・ノートン（Thomas A. Norton）船長は、1841 年 9 月 6 日から 1845 年 1 月 1 日まで捕鯨船チャールズ・W・モーガン（*Charles W. Morgan*）号で航海、粗収入 5 万 4686 ドル（2022 年換算：176 万 3888 ドル、2 億 3182 万 7746 円）[6]のマッコウ油、鯨油、鯨髭を持ち帰っている（Leavitt 2013: 11–12）。そこから、水先案内人費、埠頭使用料、鯨油鑑定費、樽製作費、医薬品費、船清掃費などの経費を差し引いたのち、ノートン船長は自らの取り分として 15 分の 1 の分配金 3417.92 ドル（2022 年換算：11 万 244 ドル、1448 万 9425 円）を受け取っている（Leavitt 2013: 12）。

ロイズ船長は第 4 節でみたように 1851 年にシェフィールド号の船長として粗収入 10 万ドル（2022 年換算：361 万 341 ドル、4 億 7450 万 7058 円）以上の価値を持ち帰っている。ホーマンによれば、1795 年から 1876 年の間の捕鯨船長の分配金は粗収入から経費を差し引いたのちの 12 分の 1 から 18 分の 1 であったので（Hohman 1928: 231）、ロイズ船長はノートン船長以上の分配金を受け取っているはずである。

人生、お金は大切であるが、それがすべてではない。ナンタケットのベンジャミン・ワース（Benjamin Worth）船長は 41 年間の捕鯨人生のうち、自宅で過ごしたのはわずか 7 年であり、同じくナンタケットのジョージ・W・ガードナー（George W. Gardner）船長も 37 年間の捕鯨人生において、自宅滞在は残片的な月日をあわせて 4 年 8 か月であった（Hohman 1928: 85）。またニューロンドンの捕鯨船ナイル（*Nile*）号は 1858 年 5 月に出港し、1869 年 4 月に帰港するまで 11 年近くにおよぶ捕鯨航海を続けている（Ashley 1938: 103）。

人は金銭的価値のためだけならば、このような捕鯨人生は送らなかったであろう。そこにはやはり金銭的価値を超えた何かがあったはずである。それは多分、人を魅惑し、虜にする鯨の魔性と呼べるものなのであろう。アメリカ帆船式捕鯨時代、鯨とは自らの破滅の恐れがあるにもかかわらず追い求める、「ファム・ファタル」（femme fatale）[7]のような存在であったのである。

お わ り に

第 1 節において少し触れたことであるが、筆者はアメリカ帆船式捕鯨時代に用いられた捕鯨ボートを模して建造された全長 8.25 メートルの捕鯨ボートに同乗し、探鯨航海に出かけたことがある。さすがに最近では小さな捕鯨ボートで海上帆走する気力も体力もないが、それでももう少し大型の船でホエール・ウォッチングを楽しむぐらいのことはできる。筆者にとっては、捕鯨もホエール・ウォッチングも鯨と遭遇するよい機会になっている。今後も何らかの形で鯨と捕鯨にかかわりをもっていくつもりである。

トーマス・ウエルカム・ロイズが 1848 年に捕鯨船で初めてベーリング海峡を越え、北極海に進出していった頃、同海域にはホッキョククジラが多数生息しており、思うがまま捕殺できた。今は昔の夢のような時代の話である。生物資源の持続的利用が唱えられている現代、乱獲を避け、厳格な資源管理の下、商業捕鯨であれ、先住民生存捕鯨であれ、それぞれにふさわしい捕鯨を継続することが望ましい姿なのであろう。そのことに異存はない。

エイハブ船長のように、銛手候補者メルヴィルのように、あるいはロイズ船長のように、小さな捕鯨ボートに乗り、手投げ銛とヤスを用いて命を賭して鯨と対峙していた頃、捕鯨には人を魅惑するものがあった。その時代の鯨を「ファム・ファタル」のようなものとして捉えたことが適切であったか否かは読者の判断に委ねておく。今回は紙幅の関係から取り上げられなかった「女鯨捕り」の物語を次の課題として残し、本稿をひとまず終えたい。

注

1）モーヴィ・ディックによって食いちぎられたエイハブ船長の片脚を「左脚」とする研究者ほかを散見するが（後藤　1983: 416, 421; 堀内　2020: 57; 千石　1990: 71, 72, 82; 有働　2010: 63）、実際のところ、原著では「左脚」とは明示されておらず、“one leg”（Melville 1851: 71）あるいは“a leg”（Melville 1851: 185）と記されているだけである。おそらく、『白鯨』の 1930 年版以降に挿入されたロックウェル・ケントの挿絵（本稿第 2 節に提示した挿絵、左脚が義足になっている）の影響によるものと思われる（“Rockwell Kent’s drawings for Moby-Dick, or The Whale”〈https://www.falseart.com/rockwell-kents-drawings-for-moby-dick-or-the-whale/〉accessed October 11, 2022）。ジョン・ヒューストン（John Huston）監督、グレゴリー・ペック（Gregory Peck）主演の映画『白鯨』においても、エイハブ船長の義足は左脚であった（DVD 版『白鯨』、20 世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン、GXBQA-16200、2006 年）。

2）ごく少数ではあるが、捕鯨の旅に出た女性も存在している。1820 年から 1920 年までの 100 年間に 4 人の女性が捕鯨船に乗り組み、航海に出たことが記録に残されている（Druett 1992: 413, 415）。その中の一人、19 歳のアン・ジョンソン（Ann Johnson）は髪を短く刈り、ゆったりとした服の下に手製のコルセットを用いて胸を隠し、女性と判明するまでの 7 か月間、捕鯨船員として働いている（ドリン　2014: 305–306）。彼女は嵐の中で帆柱によじ登り、帆を下ろす勇気を示したこともあったが、オールの取り扱いはへたで、二度と捕鯨ボートには同乗させなかった、と一等航海士は語っている（Little 1994: 253）。このような「女鯨捕り」も興味深い題材であるが、紙幅の関係で本稿では取り上げない。

3）ナスランドの『エイハブの妻、あるいは星を見つめる人』は翻訳出版されていない。彼女の著作のうち、翻訳出版されているのは『シャーロック・ホームズの恋』（ナスランド　1995）だけである。同書の概要は以下のとおりである。シャーロック・ホームズは、ふとしたきっかけでミュンヘン・オペラ交響楽団のヴァイオリニスト、ヴィクター・シーガスンと出会い、彼からヴァイオリンを習い始める。やがて彼が男装の麗人であることに気づき、彼女ヴァイオレット・シーガスンと恋に落ちる。お互いに魅かれあう仲になったが、異母兄妹であることがわかり、ヴァイオレットは溺死を装い、二人の切ない関係に終止符を打つ。この物語にも『エイハブの妻、あるいは星を見つめる人』と同様、男装女性が登場している。

4）「オフショア・グラウンド」とは、1818 年にナンタケットの捕鯨船グローブ（*Globe*）号が発見したペルー沿岸から 1600 キロメートル沖合に位置する、南北幅約 450 キロメートル、東西幅約 3200 キロメートルの長方形をなすマッコウクジラの好漁場である（フィルブリック　2003: 88–89）。

5）The Lerner Blog, “Writers in Paradise”〈https://lernerbooks.blog/2010/03/writers-in-paradise.html〉accessed October 28, 2022. 観光地のマサトランには、作家メルヴィルが同地に 1844 年 3 月 28 日から 4 月 16 日まで滞在していたことを示す案内板が掲示されている。

6）古い時代のアメリカ・ドルの 2022 年価値への換算には、モーガン・フリードマン（Morgan Friedman）による「インフレーション・カルキュレーター（The Inflation Calculator）」（〈https://westegg.com/inflation/〉accessed August 16, 2023）を用いた。円換算には 2022 年平均仲値 1 ドル＝131.43 円を用いた（〈http://www.murc-kawasesouba.jp/fx/year_average.php〉accessed August 16, 2023）。以下、換算はすべて同じ手法による。

7）「ファム・ファタル」については、松浦（2004：第 4 章）、齊藤（2008：第 5 章）を参照のこと。

文献

Ashley, Clifford W.

（1938）*The Yankee Whaler.* New York: Dover Publications.

Bockstoce, John R.

（1986）*Whales, Ice, and Men: The History of Whaling in the Western Arctic.* Seattle and London: University of Washington Press.

ドリン、エリック・ジェイ

（2014）『クジラとアメリカ―アメリカ捕鯨全史―』（北條正司・松吉明子・櫻井敬人訳）東京：原書房。

Druett, Joan

（1992）*She Was a Sister Sailor: The Whaling Journal of Mary Brewster 1845–1851.* Mystic, CN: Mystic Seaport Museum.

（2001）*Petticoat Whalers: Whaling Wives at Sea 1820–1920.* Hanover and London: University Press of New England.

後藤明生

（1983）「エイハブとモゥビ・ディク」大橋健三郎［編］『鯨とテキスト―メルヴィルの世界―』東京：国書刊行会、408–425 頁。

浜口　尚

（2016）『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究―国際捕鯨委員会の議論とカリブ海ベクウェイ島の事例を中心に―』東京：岩田書院。

Heflin, Wilson

（2004）*Herman Melville’s Whaling Years.* Nashville, TN: Vanderbilt University Press.

Hohman, Elmo Paul

（1928）*The American Whaleman: A Study of Life and Labor in the Whaling Industry.* New York: Longman, Green & Co.（Reprint: Alpha Editions, 2020）

堀内正規
（2020）『「白鯨」探究―メルヴィルの〈運命〉―』東京：小鳥遊書房。
キング、リチャード・J.
（2022）『クジラの海をゆく探究者たち』（下）（坪子理美訳）東京：慶應義塾大学出版会。
Leavitt, John F.
（2013）*The Charles W. Morgan,* 2nd ed. Mystic, CN: Mystic Seaport Museum.
Little, Elizabeth A.
（1994）The Female Sailor on the *Christopher Mitchell*: Fact and Fantasy. *American Neptune* 54（4）: 252–258.
Madison, R. D.（ed.）
（2016）*The Essex and the Whale: Melville's Leviathan Library and the Birth of Moby-Dick.* Santa Barbara, CA: Praeger.
Marquardt, Jim
（2019）*True Stories of Old Sag Harbor: Whaling Adventures, Indians and Colonists, Wars, Shipwrecks, Writers and Artists.* Sag Harbor, NY: Harbor Electronic Publishing.
松浦　暢
（2004）『宿命の女―イギリス・ロマン派文学の底流―』（増補改訂版）東京：アーツアンドクラフツ。
Melville, Herman
（1851）*Moby-Dick or The Whale.* New York: Harper and Brothers.（Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1988）
メルヴィル、ハーマン
（1972）『メルヴィル（白鯨／書記バートルビ）』（阿部知二訳）東京：筑摩書房。
（2000a）『白鯨』（上）（千石英世訳）東京：講談社（講談社文芸文庫）。
（2000b）『白鯨』（下）（千石英世訳）東京：講談社（講談社文芸文庫）。
（2004a）『白鯨』（上）（八木敏雄訳）東京：岩波書店（岩波文庫）。
（2004b）『白鯨』（中）（八木敏雄訳）東京：岩波書店（岩波文庫）。
ナスランド、セナ・ジーター
（1995）『シャーロック・ホームズの恋』（青木久恵訳）東京：早川書房（ミステリアス・プレス文庫）。
Naslund, Sena Jeter
（1999）*Ahab's Wife or, The Star-Gazer.* New York: HarperCollins.
Norling, Lisa
（2000）*Captain Ahab Had a Wife: New England Women and the Whalefishery 1720–1870.* Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press.
大串尚代
（2002）「もうひとりのエイハブの妻」『ユリイカ』34（5）: 210–219.
オールソン、チャールズ
（1983）「キリスト」（島田太郎訳）大橋健三郎［編］『鯨とテキスト―メルヴィルの世界―』東京：国書刊行会、190–214 頁。
大和田俊之
（2002）「メルヴィル全著作解題―メルヴィルをめぐるアメリカ文学史―」『ユリイカ』34（5）: 143–157.
フィルブルック、ナサニエル
（2003）『復讐する海―捕鯨船エセックス号の悲劇―』（相原真理子訳）東京：集英社。
Rollyson, Carl, Paddock, Lisa and April Gentry
（2007）*Critical Companion to Herman Melville: A Literary Reference to His Life and Work.* New York: Facts on File.
齊藤貴子

（2008）『もう一度、人生がはじまる恋―愛と官能のイギリス文学―』東京：PHP 研究所（PHP 新書）。
Schmitt, Frederick P., de Jong, Cornelis and Frank H. Winter
（1980）*Thomas Welcome Roys: America's Pioneer of Whaling.* Charlottesville, VA: The University Press of Virginia.
千石英世
（1990）『白い鯨のなかへ―メルヴィルの世界―』東京：南雲堂。
Starbuck, Alexander
（1878）*History of the American Whale Fishery from Its Earliest Inception to the Year 1876.* Waltham, MA.（Reprint: Alpha Editions, 2021）
杉浦銀策［編］
（1983）「年譜」大橋健三郎［編］『鯨とテキスト―メルヴィルの世界―』東京：国書刊行会、455–467 頁。
巽　孝之
（1995）『ニューヨークの世紀末』東京：筑摩書房。
有働　薫
（2010）『幻影の足』東京：思潮社。
Winter, Frank H. and Mitchell R. Sharpe
（1971）The California Whaling Rocket and the Men behind It. *California Historical Quarterly* 50（4）: 349–362.

〔はまぐち　ひさし　文化人類学〕